

国指定史跡永福寺跡の見学と永福寺研究の問題点

大三輪 龍彦

平成七年十一月四日（土）の午後、鶴見大学仏教文化研究所の所長以下の所員と、遺跡に興味のある教職員や大学院生など、総勢十四名で、現在発掘調査中の永福寺跡を見学した。この遺跡は鎌倉市二階堂に在って、数少ない鎌倉時代初期の寺院址で、しかも、後世の大幅な改変を受けていない良好な状況を遺していることによって、国の史跡に指定されている。永福寺跡については、昭和の初年から赤星直忠博士によって研究が重ねられ、極めて小範囲の発掘調査のデータしかない状態ながら、地上の詳細な観察結果を加えて復元想定図が完成していた。その後の大規模な発掘調査の結果が細部はともかくとして、大筋では赤星氏の復元想定図と合致していることには驚嘆せざるをえない。庭園については森蘊氏の研究があり、文献史料の上では貫達人氏による『鎌倉の廃寺―永福寺・勝長寿院―』（鎌倉国宝館論集）がある。

昭和四十二年から国庫補助を受けて、鎌倉市による史跡地買収が進められ、昭和五十七年から現在まで、史跡整備のための発掘調査が続けられている。その結果すでに桁行五間（六四尺）、梁行五間（五八尺）の二階堂（本堂、桁行五間（五五尺）、梁行五間（四二尺）の阿弥陀堂と薬師堂、各堂をつなぐ複廊や南北翼廊及び中門、橋、苑池などが検出された。本年度は苑池北東部が調査されており北側汀線から張り出した岬状の遺構や二階堂川からの取水口などが確認されている。現地を訪れた我々一行は、調査主任の福田誠氏より詳細な説明を受け、出土した木製塔婆類や

陶磁器類や瓦等も見学の機会を与えて頂き有意義な時間を過ごさしていただいた。記して深く感謝したい。

永福寺の研究については、今後に多くの問題点があるが、その中でも、永福寺研究の根幹に触れると思われる源頼朝による永福寺建立の事情を明らかにする必要があるように思う。その事について、筆者自身が今後研究したいと考えており、ここでは、現在の定説に対する若干の疑問と進めるべき研究の構想について述べておくこととしたい。永福寺の名が史料に初めて現れるのは『吾妻鏡』文治五年十二月九日条である。「今日永福寺事始也。奥州に於て、泰衡管領之精舎を覽ぜしめ、當寺花構を企てらる之懇府は、且は数万之怨霊を宥め、且は三有之苦果を救はんが為也。抑彼梵閣等、宇を並ぶるの中、二階大堂大長寿院と号す有り。専ら之を模されんにより、別に二階堂と号す。(以下略)」とあるこの記事によって永福寺は、源頼朝が源平合戦や奥州征伐などで戦死した将士の怨霊鎮魂を願って建てた寺で、伽藍や苑池は平泉中尊寺の大長寿院を模していたといわれてきた。確かに、この記事だけで見る限り、そう解するのも極めて当然といわなければならないまい。しかし、近年、永福寺跡の発掘調査が進んで、その全容が明らかになると同時に、平泉でも考古学的調査が重ねられてその成果が公表されているが、その両者を対比してみると、必ずしも一致点や相似点は多くなく、どちらかといえば、あまり似ていないように思う。最も『吾妻鏡』でも文治五年十二月九日以降、しばらくの間は永福寺造営に関する記事は見られず、次は建久二年二月十五日条まで待たねばならない。事実上、この間は造営事業は行われなかったらしく、同条では「晩に及び幕下大倉山辺を歴覽し給ふ。精舎を建立せんが為に其の霊地を得給ふの故なり。是れ去々年奥州を征し給ふの時。合戦無為の後。鎌倉中伽藍を草創すべきの由、御立願あり。而るに彼年暮れ訖ぬ。去年奥州の騷動、国土の飢饉并に御上洛等計会す。之に於て営作無し。今に於ては郡国悉く静謐す。民庶皆豊稔之間、漸に其沙汰有り。善信、行政、俊兼等奉行すべしと云々」とその事情を記している。この記事は、永福寺の寺地を得るために頼朝が大倉山の辺を見て歩いたこと、奥州征伐が終った後に永福寺建立

を発願したが、奥州騒動や国土の飢饉、頼朝自身の上洛で永福寺建立が行われなかったこと、造営の奉行を三善善信、二階堂行政、藤原俊兼とすることの三点からなっている。先ず第一点については寺地の選定がこの時点から始まっていることを示しており、文治五年の発願時には寺地の占定さえ終わっていなかったことになる。とすれば、いわば基本構想の段階であり、具体的な計画がどの程度固まっていたかは疑わしい。従って、文治五年十二月九日条の記事を以って完成時の永福寺が平泉の諸寺を模していたとするのは、いささか根拠に乏しいのではないだろうか。第二点は造営事業の遅れた理由を三つ挙げているが、何れも納得できる理由である。しかし、以後の永福寺の寺観に大きな影響を与えたのは、この内の建久元年に行われた頼朝の第一回目の上洛にあったのではないだろうか。